アジア人財コースの自立化を目指した試行授業
－共通教育科目への取り込み－

橋本 智

HASHIMOTO, Satoshi

徳島大学国際センター

要旨：アジア人財資金構想のコース終了に伴い、同コースの内容を共通教育の「日本事情」に取り込む試みを行った。大学にはアジア人財の自立化が求められており、教育部分は既存の授業に移行させる計画である。当初はアジア人財コースと同じ内容を行う予定だったが、学生の構成やニーズの違いで、より日本語と日本事情に中心を置く授業を行うことになった。今後は、単なる就活や就職に焦点をあてたものではなく、学生のニーズに合わせたものに作り替え、また日本学生も参加可能な魅力的で効果的な授業を考えていきたい。

キーワード：アジア人財、自立化、共通教育、就活

１．はじめに

経済産業省と文部科学省が平成１９年度から開始したアジア人財資金構想高度実践留学生事業に、徳島大学は平成２０年度より参加した。このプログラムでは徳島大学に在籍する外国人留学生を対象に、ビジネス日本語、日本ビジネス教育、インターンシップ・プログラム、就職支援などを行ってきた。平成２２年度には本学２期生のコースが終わり、アジア人財事業自体も同年度で終了することになった。事業終了に伴い、アジア人財の参加組織・大学にはそれぞれ自立化が求められている。

徳島大学国際センターでは、アジア人財コースの終了にむけて、終了の一年前に当たる本年度に試行的に教育部分の自立化に向けた授業を行った。

２．これまでのアジア人財コースとの違い

2.1　アジア人財コース

本学アジア人財コースでは、大学・大学院に所属する外国人留学生に対して、教育面に関しては以下のような内容が扱われた。（１）日本独特のものである就職活動の準備、（２）インターンシップのための準備と実際のインターンシップ体験、（３）日本企業へ就職した後に必要な社会人としてのスキル、（４）これらを支えるための日本語能力の向上。（５）ＰＢＬ(Project-Based-Learning)を用いたタスク型学習。学生のニーズや日本語能力などに合わせて、ＡＯＴＳが作成したアジア人財のための配信教材、市販の書籍や教科書、また新聞記事などを使って授業をすすめた。

2.2　自立化に向けての授業

事業の自立化に向けて、教育面での方策はいくつか考えられた。これまでのアジア人財のような独立したコースを作ることも選択肢の一つだったが、予算の確保や単位化の難しさなどの理由で見送られた。それで、アジア人財の内容は共通教育の科目の一つである「日本事情Ｉ」（前期）と「日本事情ＩＩ」（後期）に移行させ、学部生を中心に授業を行うことにした。

本来共通教育は学部１・２年生を対象にしているものだが、アジア人財の内容を考慮して、広く本学外国人留学生に開放し、将来日本の企業や海外の日系企業に就職を希望する学生を募った。ポスターを張り出したり、直接学生たちに受講を呼び掛けたりしたものの、結局アジア人財が本来ターゲットとしていた就職を目指す学部３~４年、修士１~２年の学生は集まらなかった。単位が出ない、あるいは必修ではない授業に学生を集めるためには、彼らにとって身近で魅力のある内容を提示する必要を感じた。

３．授業内容

3.1　「日本事情Ｉ」の内容

アジア人財の内容を引き継ぎ、留学生の就職活動や就職後の仕事・生活をスムーズに行えることを目的に内容を組み立てた。授業開始当初は、前期の「日本事情Ｉ」では主に就職活動のための指導、特に日本の就職活動の仕方、会社説明会への申し込み、履歴書の書き方、自己アピールの書き方を行う計画を立てた。加えて、これまで正規のアジア人財コースで行っていたように、日本の最新事情に触れながら日本の

社会を知り、同時に日々のニュースを気にかける習慣をつけさせるために、日経新聞の記事を読み、内容をまとめて話し、その中の語彙を覚えるという活動も行うことにした。

しかしながら、授業を開講してみると、前述したように通常の「日本事情」の受講生しか集まらなかった。前期では、学部１・２年生二人、研究生一人、学術協定校との交換留学生二人が受講生であった。学部生にしても就職活動は差し迫っておらず、研究生や交換留学生も日本での就職活動の必要を感じていない状況だった。

アジア人財の内容を共通教育に移して試行的に行ってみるとしても、学生の状況とニーズに合わない授業はできず大変戸惑った。最初の授業でこの点を学生たちと考慮してみると、彼らは差しあたって就職活動はしないものの、日本事情の一つとして学んでみたいということだった。また、就職活動や就職した後のことを題材にして留学生の日本語能力を引き上げることも十分にできるので、計画した内容を行うことにした。ただ、就職活動を実際にすぐに行う学生たちではないので、本来の「日本事情」に近い形で、日本のビジネスや社会に関する内容を取り込んだ形にした。

前期の「日本事情Ｉ」で扱った内容は、以下のとおりである。

① 新聞の読み方
構成や文体について学習した。見出しの読み方を考え、見出しを文にしたり文を見出しに直したりする練習をした。

② 就職活動の流れ（時期、就活の語彙）
就活の具体的な流れを説明した。エントリーシートや自己ＰＲといった言葉を紹介し、日本での就活の仕方を整理した。

③ エントリーの仕方
ウェッブエントリーの方法やセミナー・説明会への出席について考えた。

④ 採用情報の集め方
どのように採用情報を読み取るかを、具体例を見ながら学習した。「手取り」「社員持ち株制度」「フレックスタイム」などの語彙の学習も行った。

⑤ 会社説明会への申し込み・資料請求
会社説明会に申し込む練習をした。会社説明会の資料請求をメールでする場面と、説明会の申し込みを電話でする場面を扱った。申し込みの流れを確認した後、電話とメールのマナーや使うべき敬語を学習し、会社説明会の申し込みのロールプレイなどを行った。また、予約の変更をお願いする場面も練習した。

⑥ 電子メールでの依頼の仕方

⑦ 社会人基礎力
経産省が提唱している、就職するために必要な能力である「社会人基礎力」を取り上げた。各項目の意味と実際の社会での必要性を考え、自分はどのくらい社会人基礎力（主体性、計画力、発信力など１２項目）を持っているかを自己評価した。そこから自己分析を始めた。

⑧ 自己表現活動
自分の長所と短所（足りない点、改めようと思っている点）を、具体的なエピソードと共に書いた。
「行動カード」を使って自分を振り返る活動をし、加えて自分の性格や傾向を表す表現を学習しそれを記述した。短所を長所に変える記述方法も検討した。

⑨ エントリーシートの記入
自己分析をもとに、エントリーシートを書いた。ここでは、学習者の目指す業界や企業の具体的なイメージはないので、一般的な自己分析をした。また、外国人としての強みをどう表現できるかも考えた。

⑩ 履歴書の記入
履歴書と送付状、封書のあて名を実際に書いた。また、書き言葉の敬語を確認した。

⑪ ビジネスマナーの基本
会社での自己紹介を練習し、社内外での様々な挨拶やお辞儀について学んだ。
また、相槌など日本人との適切な会話の仕方を考えた。

⑫ 業界研究
日本の業界や大・中小企業について、また業界に関する語彙を学習した。業界研究の必要性とその方法も学んだ。

⑬ 日経新聞の精読と語彙テスト
毎回日経新聞から、ビジネスに関する最新の記事を精読し、そこから読み取れる日本のビジネスについてクラスで考慮した。また、その中で扱った語彙の漢字と意味を、次の授業の最初の小テストで確認した。

3.2 「日本事情 II」の内容

前期ではエントリーシートや履歴書の記入など、就活に必要な「書き」の学習を主に行ったので、後期は就活時の面接の練習を中心に行う計画を立てた。しかし、受講の学生のニーズはそこにないことが分かった。前期受講した学部生二人は引き続き受講したものの、協定校と

の交換留学生と研究生は入れ替わり、新たな交換留学生が六人と研究生が二人加わった。つまり、これら新しく「日本事情Ⅱ」を履修する学生は前期で学習したことを全く知らないわけで、自己分析などもしておらず、後期に予定していた「面接」の練習をすることは不可能であった。

そこで、前期の復習を簡単にしつつ、日本での就活・就職を学生の日本語レベルの向上と日本文化の理解を進めるためのトピックとして使うような方向に大きく転換することにした。二人の学部生からは、引き続き就活を中心に扱ってほしい、面接の練習もしてみたいと言う声もあったが、二人とも就活はまだ数年先であり、日本語レベルの向上も必要な状態であったので、今回はこのような内容で進めることにした。

後期の「日本事情 II」の内容を以下に記述する。

① 社会人としての自己紹介の仕方
学生としてではなく、職場での自己紹介の練習をした。

② 就職活動の理解
前期の内容を復習し、日本の就活の流れや語彙などを学習した。

③ ビジネスマナー
なぜビジネスマナーが必要なのかを考えた。そのあと、実際のビジネスマナーのいくつか（会社訪問、名刺交換、席次など）を考慮した。

④ 敬語
最初になぜビジネス場面で敬語を使う必要があるのかを考えた。それからビジネス会話での敬語を練習した。
「クッション言葉」を学び、スムーズなコミュニケーションの仕方について考えた。
また、メールのやり取りの際に使われる敬語も学習した。

⑤ アポイントメントの取り方
ビジネスの相手とのアポイントメントの取り方をロールプレイ形式で練習した。

⑥ ビジネスメールの書き方
件名や挨拶文の書き方など、ビジネス場面の特徴を意識しながら書く練習をした。

⑦ 社会人基礎力
社会人基礎力を概観し、とくにチームワークの重要性について考えた。

⑧ 企業・業界研究
履修者は特定の企業や業界に関心があるわけではないので、一般的な業界について概観し、就活の際にどのように調べていくのか、なぜそのことが必要なのかを考えた。
また、本学で外国人留学生のための就活セミナーが計画され、いくつかの企業の人事担当者が話をされることになっていたので、受講生をグループに分けて、その企業の研究をさせた。それをスライドにまとめ、クラスで発表をしてもらった。

⑨ 仕事と家族
日本人の思考や行動を理解するため、コースの最後の部分では「家族」に焦点を当てたトピックを扱った。将来同僚となるかもしれない日本人の関心事、悩みなどを考慮し、実際の日本人のライフスタイルを理解できるように授業を進めた。
AOTS の配信教材に載せられている、家族を話題にした川柳や「現代日本人のライフスタイル」の統計を読んだりした。

⑩ 「新人力トレーニング」
『一歩先を行く!!新人力トレーニング』（池谷聡）から、入社後に求められる新入社員としての気遣いや行動に関する部分を抜粋し、学生と一緒に日本の会社で求められるものについて考えた。例えば、「課長から数日前にされた指示を忘れてしまった。どうしたらいいか」といった状況で、「再度伺ってもよろしいでしょうか」と謙虚な姿勢と言葉遣いで依頼すべきだといったことを考えた。これは、毎回授業の初めの 10 分程度を使って行った。

⑪ 日経新聞の精読と語彙テスト
前期と同様、毎回日経新聞の記事を精読し、内容と語彙の把握をした。また、前回扱った記事からの小テストも行った。

4. アンケート

4.1 就職に対するアンケート

後期の最後に、受講生に対して日本での就職に関するアンケートを行った。

① *「将来日本の企業に就職したいですか」*
「はい」二人、「いいえ」一人、「分からない」四人
「はい」と答えた理由は、日本語をずっと勉強しているから、給料が高いからというものだった。「いいえ」の理由は、形式が堅苦しいから。「分からない」の理由は、日本の企業に限らない、就職が難しいといったものであった。

② *「将来、自分の国や外国にある日本の企業に就職したいですか」*
「はい」四人、「いいえ」三人

「はい」の理由は、就職後もっと日本のことを勉強したい、日本の企業の雰囲気を経験したい、日本語を生かしたいといったものがあった。「いいえ」の理由は、日本の企業に限らない、日本のビジネス文化が難しいそうだといったものであった。

③ *「将来、日本の企業でない会社に勤めても、日本と関係のある部署で働きたいと思いますか」*

「はい」五人、「いいえ」一人、「わからない」一人

「はい」の理由は、日本語を勉強しているからが多かった。「いいえ」の理由は、日本企業で実際に働きたいから、というものだった。

4.2 考察

七人という少ない回答ではあったが、受講生はほぼ日本国内外の日本企業で働きたいという意欲があることが分かった。特に、自国に戻ってから日系企業に努めたいと考えている様子も分かる。自分たちが学んできた日本語や体験した日本文化に関する知識を、将来どこかで役立てたいという思いが表れている。

日本のビジネスに関して、どんなことを知りたいか聞いたところ、外国人の採用の具体的な例を聞きたい、日本の会社のシステムや日本のビジネスマナーをもっと知りたいという声があった。このアンケートから、学生たちは就活の具体的な方法についてよりも、日本のビジネスに関する全般的なことを知りたいという意見が強いことが分かった。

5. まとめ

アジア人財コースの自立化に向けて、教育の部分では共通教育の「日本事情」にアジア人財の内容を移して、本年度試行的に授業を行った。結果として分かったことは、当然のことではあるが対象学生が大きく異なるため、同じような内容を扱うことは難しいということである。就活を目指す学生に受講してほしいと思っているが、学部生・院生ともに卒業・修了が近づくについて専門の勉強が忙しくなり、単位に必要のない授業への参加は困難になるだろう。それで、現時点で既存の共通教育の「日本事情」にアジア人財の内容を取り込むというのであれば、目標を単に就活や就職後のため、とするのではなく、それらをトピックとして日本語能力の向上を目指す、あるいは日本事情の一部として日本の文化や社会を知る、といったものにしていき、そのための教材や教授内容を選択する必要があるだろう。

一方で、外国人留学生が日本企業、日系企業に就職する数はこれから増加していくだろう。また、企業のグローバル化が叫ばれてはいても、日本人と一緒にチームとなって働くために必要な素質を備える外国人が求められる状況に変化はないだろうし、出口教育として大学でもその分野の教育を行っていく必要もあるだろう。そのためには、これまでアジア人財で扱われてきた内容の教育は引き続き行われるべきだと考える。そのために、共通教育での授業を学生がより魅力的で効果的なものと感じるものにしていきたい。

こういった観点から、もう一度「ビジネス日本語」の内容を再考することも必要だと考える。学生はビジネス場面での具体的な日本語の表現や敬語、マナーなどを学びたいと考えているが、それだけでなくもっと本質的なもの、日本人との違和感のないコミュニケーションの仕方自体を学ぶよう助ける必要があるだろう。それは、マナーや敬語などの裏側にある、日本人のものの考え方、好き嫌い、思考スタイルなどである。外国人学生に対して「日本人になる」ように、日本人に同化するように教育するのではなく、日本人の発する言葉や振る舞いの背後にある考え方や好き嫌いを理解し、日本人と友好な関係を築けるよう学生を助けていくことが大切だと考える。学生がそのことをしっかり理解すれば、自ずと必要とされる適切な日本語の表現や振る舞い方などができるようになるだろう。このような概念が「ビジネス日本語」教育に含められるような形を作っていきたいし、それを授業の中でも実践していきたい。

加えて、日本人学生にとっても、アジア人財で扱われた内容は十分必要なもので、さらにグローバル化が進む現在、外国人との関わりを学ぶ必要もあり、このような共通教育の授業に日本人学生を取り込むことも検討すべきだと考える。

参考資料

池谷聡『一歩先行く!!新人力トレーニング』2009, TAC 出版

高橋伸子『幸せの値段』1998, 青樹社

AOTS『仕事と家族プロジェクト』アジア人財資金構想配信教材